

路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

2004年9月1日発行

# 露宿

第32号

Rojuku

## 露宿

## 目次

表紙写真	藁科祐子	
文中写真	岡田知子	
梅雨入りの歌	富士森和行	2
山頭火の野宿	橋安純	3
轍の人生は美しく険しい	田代猛	5
五行詩	近松雅之	7
こはんの雨	ゆげこうすけ	8
ブー太郎からの脱出	あずまきよし	9
現在を生きている貧乏神他	名無しの権兵衛さん	10
夏まつり	いさむ	11
ジョーンズの豆の木2	秋戸空	13
陰/街	秋戸空	14
宿無しの散歩道	中津川あゆみ	15
怪男シリーズその一	山下金七	25
怪男シリーズその二	山下金七	29
歌集「馬捨山」より	望月大成(挿し絵も)	31
自由の国他	名無しの権兵衛さん他	35
惑星ひとつぶ通信	高橋美香	36
あかい花	はり師いが丸	37
夢の中の恋人他	名無しの権兵衛さん	38
編集後記		

# 梅雨入りの歌 十五首

富士森和行

忘れるし物の如くに履きおれば老いの足に下駄の緒の馴染まず  
なじみ難き山谷の生活と下駄の緒よ梅雨入りの路地の白粉の花  
しかつめらしく街の画廊に見入る眼の頻りに蔑みて路上へ投げる

(6/7新宿大ガード下の一般の目線)

わが余生の愉悦の場所の幾つかありて菖蒲田に蛙の声聞く  
立ちこめし花の匂ひの一辺に朝の花やのシャツターが開く  
果せざる想ひにひと日梅雨ぐもる中に起稿す京都遙るかに

(6/4 京都大谷会館、寄場交流を想ふ)

生憎の雨となりたる鳥越の祭よわが旧友の住みし町なり

誰らかし生きつゝ尚もわが身をば正当化せむと老いのあらがふ

殺伐としたドヤの生活続くにも窓辺にひと鉢の石竹赤し

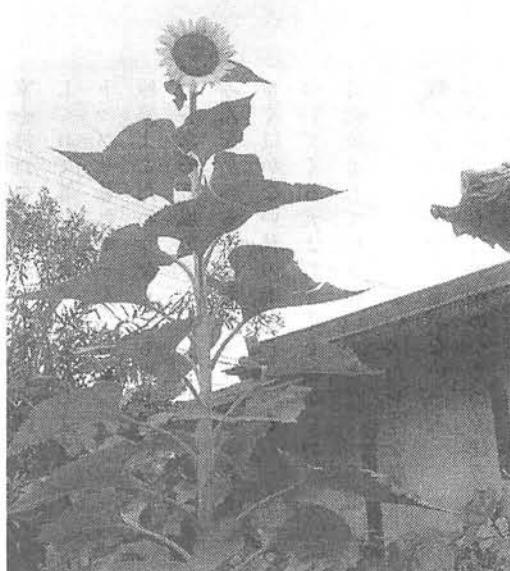
頑くな意志を曲げざる路上の友の高級ワイン貰ひて拝む

甦へる吾が身一つの時ありて夕べ銭湯の暖簾くゞりぬ

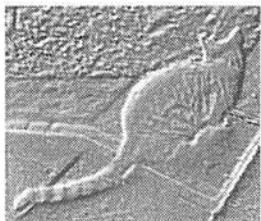
(6/5 橋場玉の湯にて)

梅雨どきの腐えて匂ふに蟲が飛ぶわれも軀ては腐えて消え行かむ  
「自己責任」と云ふ語きわめてシンプルに聽ゆれどたわ易からむ語ではあらむや  
昏れて行く場末の町の雨の音わが過去の忌にダビングしつゝ  
沛然たる秋の雨にはあらねども鬱々として心をぬらす

6/5黎明館22号にて



# 山頭火の 野宿



橋 安純

金銭をもらうこと（托鉢）で生計を建てながら、旅をしていました。そのみすばらしい身なりで宿泊を断られたり、また收入が無かつた時に野宿となりました。

また庵を構えていた時にも泥酔して野宿することがよくあつた。

ここで泊ろうつくつくぼうし

どなたかかけてくださった蓮あたたかし

醉うてこほろぎと寝ていたよ

落葉しいて寝て樹洩れ日のしづか

寝るところが見つからないふるさとの空

今夜の寝床を求むべきぬかるみ

夜露もしつとり春であります

まどろめばふるさとの夢の葦の葉ずれ

落葉しいて寝るよりほかない

山のうつくしさ

生きる身のいのちかなしく月澄みわたる

わが手わが足われにあたたかく寝る

ここで寝るとする草の実のこぼれる

ねるところがないどかりと暮れた

生きる身のいのちかなしく月澄みわたる

わが手わが足われにあたたかく寝る

ここで寝るとする草の実のこぼれる

ねるところがないどかりと暮れた

生きる身のいのちかなしく月澄みわたる

行つた。托鉢の厳しい規律を守っていたとはいえない。

炎天をいただいて走り歩く

寝るだけが楽しみの寝床だけはあるホイトウとよばれる村のしぐれかなどうしようもないわたしが歩いている捨てきれない荷物のおもきまえうしろあるだけのものを着てあたたかうをる何でこんなにさみしい風ふく家を持たない秋がふかうなるばかりしぐれて暮れてきて寝るとしようトップリ暮れて一人である雑草よこだわりなく私も生きている何を求める風の中行くみんなかへる家はあるゆうべのゆきき歩くほかない秋の雨ふりつるるついてくる犬よおまえも宿なしか日向ぼこして生きぬいてきたといったやうな顔で錢がない物がない歯がない一人この旅、果もない旅のつくつくぼうしほろ着て着ぶくれでおめでたい顔で

3

現在、週刊漫画誌『モーニング』に「いわしげ孝」が『まっすぐな道でさみしい種田山頭火外伝』を連載しています。死後六十年あまりですが、今でも人気があり、山頭火を扱えば視聴率や販売数が上がるそうです。

托鉢は僧侶が門前でお経を唱え、米やお金をもらう修行の一つである。山頭火はその金で酒を飲み、ときには遊郭へも

山頭火は僧侶として家々を回り、米や



### ほろほろ酔うて木の葉ふる

山頭火の暮年とつた

無錢で豪遊するなど酒の上の失態を数々起こしている。尻拭いは匂友にまかせきりにして、本人は、酔いからさめると自己嫌悪に陥り旅にでるのだつた。

酔いしれて路上にねむる一ときは

安くもあらん起したまぶな  
酔いどれも踊りつかれてぬくい雨  
酒がやめられない木の芽草の芽  
酒がほしいゆふべのさみだれてくれ  
何もかも捨ててしまはう

酒杯の酒がこぼれる

風のなか酔うて寝ている一人  
酔いざめの風のかなしく吹きぬける  
なにもかも一人でよろしい冬の夜の酒  
ぱろ壳って酒買うてさみしくもあるか  
おもいでがそれからそれへ酒のこぼれて

### 草にすわり飯ばかりの飯をしみじみ

山頭火は當時、無季自由律の俳句界ではスター的存在で、匂友に歓待され駆走になることはあつた。しかしそれ以外は貧しい食事であつた。  
金があれば酒を飲んだ、栄養状態は悪く歯はかけ、とてもふけて見えた。  
よく匂友に援助を求めているから絶食が続いたとしても、餓死の恐れはなかつたはずだ。

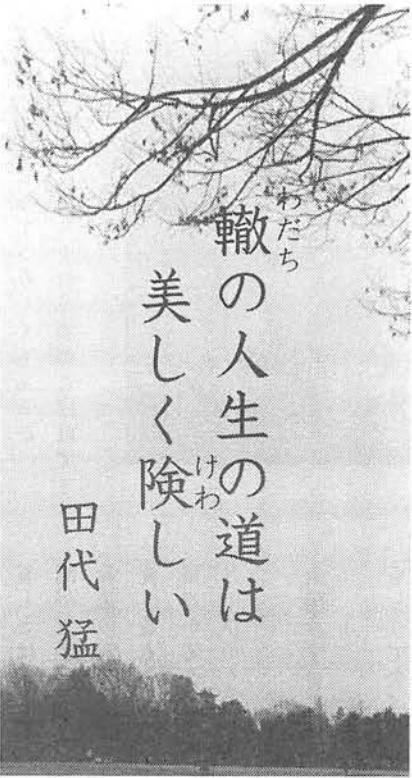
しみじみ食べる飯ばかりの飯である

食べるもの食べつくしてひとり  
お茶でもすませる今日が暮れた  
貧しさは水を飲んだり花を眺めたり  
闇が空腹  
最後の飯の一粒まで今日が終つた  
食べるもの食べつくしたる旅に出る  
風ひかる今日の御飯だけはある  
月のひかりの

すき腹ふかくしみとうるなり  
太陽うずまく  
食べる物がないので食べない  
もらうて食べるおいしさ有りがたき

講談社スープ文庫『山頭火大全』  
を底本とした。





# 轍の人生の道は 美しく険しい

田代 猛

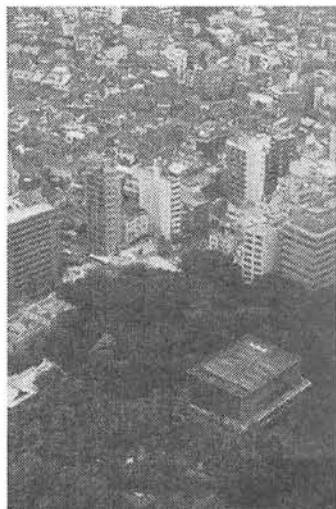
連日猛暑が續きます。気象序始まつて以来の猛暑だそうです。人間の普通体温を越えて三九度・四〇度とは恐れ入ります。昔の諺に「心頭滅却すれば火も又涼し」の言葉があります。戦後昭和二年ベストセラーアズになりました「愛情は降る星の如く」尾崎秀実著の本がありました。戦後の日本を震撼させましたゾルゲ事件で戦争終戦の直前の内閣秘書官がスパイ事件に関与し終戦直前の八月一三日に刑死致しました。尾崎秀実が一人娘の陽子さんに獄中より刑死直前迄に文通した手紙の赤裸な文面ですが、その強烈な人間に対する優しさ、暖かさ、思いやりは、戦後の人々が愛に欠け愛を求め暖かさを求めた時代に人々の心を打ち共感を

呼んだ本でした。私も書店に並んで求めたことを想い出します。刑死直前に何か云ひ残すことわないのでの一言に「心頭滅却すれば火も又涼し」の言葉を残して刑死致しました。私が何故このようない話をして記してゐるかは、この猛暑の中でふとその諺を想起致してそんな胸中的一片でもあればと考えて猛暑の中「アブアブ」しながら思ひおこしました。

二、三日前内閣府が〇三年の自殺者数を発表しましたが、三四四二七人。過去最高、中高年者は六割以上、三〇代の人も一七%増、格差の拡大、弱者の増大と発表しました。大企業は回復、生産率は向上増大等々と記してありましたが、その陰で「リストラ」「リストラ」に泣く人々が增多してゐる事実が現実です。此の間十チャンネル日曜日のサンデープロにニッサンのゴーン社長が出て企業回復の立役者として語つてゐましたが、数万人のリストラを行ひ東村山工場は全廃、座間工場は半減、家族合せて数万人の人々が現在も苦しい生活、「ホームレス」に落ちいつた人々も多数いますし、自殺者も多数出てゐる現実。マスコミ、メディアは眞実の姿を伝えるべきなのに何故か知らねども隠された報道に疑問をおぼえます。小泉首相のマジック的な政治手法も限界に、いや破綻してゐるよう思はれます。昨



日、新聞、テレビで新潟、福井の豪雨による被災地の人々に匿名で「タカラクジ」の二億円の「アタリクジ」を送つて役に立てて下さいと報じてゐました。その報道を知り、私は深く思ひました。去だ、日本人もこんな人を愛し優しく暖く思ひやる人々があることに深く深く胸を熱く致しました。そして何か知ら生きる希望の糧の一つが心を刺しました。私からも心から「有難う」御礼申しあげたいと思ひます。人々が一人でも幸福になることが究極の政治であり経済でもありますと私は思ひます。三十二号が出る九月初秋の涼風が社会の弱き人々に涼しい涼しい風にならんことを祈りつつ……。



七月二十六日三十五度の猛暑に記す。

- 一、灰色の東京砂漠の小さき我のオアシスに朝顔一輪  
一、反戦の小さき列につくひとり老人心の腕に力こもりけり  
一、獨り住み淋しからむと人云えど氣配り要らぬ安けさもある。  
一、別々に一生を生きていく露宿の愛讀者、  
仲間そして編集者ありて我この世明るし

一、三万の自死者はただ数となるその苦しみを思ふ人あれ  
(長崎の被爆者の一人として近づく八月九日をまえに)  
一、アメリカがテロの恐怖を語るとき、しみじみ思ふ  
"ヒロシマ" "ナガサキ" の悲惨さを。

# 五行詩

練金

失踪

近松 雅之

現代の妖怪  
闇から闇へ  
振り回される恐怖  
素数のように  
想像の產物

恐れ

欲しいのは  
刺激に満ちた自由  
恐怖が快感に  
変わる瞬間  
世界の秩序

伝道師

紅い海を越え  
大陸を從えて  
恐怖を降らせた見返りに  
自由は手に入つたかい?  
秩序は生まれたかい?

拵声器

早朝から  
叩かれるドア  
悪い夢  
窓の下は拵声器  
夢でしよう

雨

雨、雨、雨  
沖積平野を  
泥炭が覆う  
後には酷暑  
声を殺して

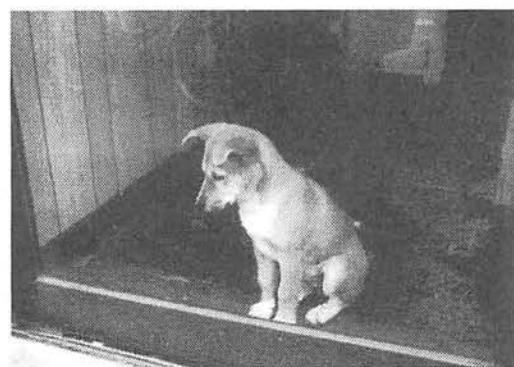
男は決めた  
失踪すると  
耐えられなかつた  
流されることに  
追いつめることに

帰還

還る場所を  
捨てた者たちは  
いつの日か  
たゆたう  
浄土を目指し

賭け

半分は期待  
半分はあきらめ  
持てるすべてを  
賭けることにした  
葛藤から逃げるため



♪ 山の淋しい、湖に、  
レレレレレレレ、哀しい心  
胸の痛みに、レレレレレ、  
昨日の夢と、焚き捨てる、  
レレレレレレレ、レレレレレ  
♪

挿入歌・湖畔の宿  
ピアノの弾き語り風  
ハーミング&歌唱

(一) たもとの端を、かみしめて、  
泣いた名残りの、別れ道、  
思い出させて、おんなの胸を、  
濡らすこはんの、こぬか雨。



## こはんの雨

ゆげこうすけ

(三) こはんの雨に濡れながら、  
いつか歩いた、この道を、  
今日も歩けば、おんなの胸を、  
風が冷たく、吹くばかり。



(二) やなぎの窓に、降る雨は、  
誰が嘆きの、涙やら、  
恋にやぶれた、おんなの胸に、  
染みるこはんの、夜の雨。  
♪ レレレレレレレ、レレレレレレ、  
岸の林を、レレレレレレレ、  
薄きすみれに、レレレレレレレ、  
いつか泪の、日が落ちる ♪

# プー太郎からの脱出

## あづまきよし



二月十五日午後四時十分、寮長が福祉に電話して  
る。許可を得て出たと言つてくれ。

外は生憎の雨、桜橋迄なんとか歩いた。今晚何処  
で寝ようと財布を見ると万札が有る。その夜はカブ  
セルホテルで寝る。朝四時頃目が覚める。ああこれ  
から大変んだ。足が悪いのに何とか直す方法ないか  
な。カブセルホテルを出て、すみだ公園に出た。

早朝のすみだ公園わ気持ちが良い。  
ブー太郎にどうぞとタバコを差し出すとニコニコ  
して有難うといつて旨そうに吸う。こまがた橋の近  
くの教会で十一時半に弁当を配るとおしえてくれ  
る。のこりのタバコを全部あげると、兄にい、きま  
えいいを、と言う。  
話をきくと、

浅草の仲見世で十年ねおきしてゐると言う。

二日目またカブセルホテルでテレビ見てねた。明  
日また、すみだ公園にいってみよう。  
二月のすみだ川はひえる。時計を見ると六時をす

ぎている。すると向うから、きのうのブー太郎がお  
はようとあたまをさげる。

朝めしたべたかとさくとたべてないと言う。ベン  
トウ二つ買つてこいと金をわたすとかつてきた。

おれも金がなくなると、こじき、やらなければな  
らないと、はなすと、

たきだしと教会、なんようびは、どこどこでやつ  
てることを、くわしくおしえてくれる。

三日目またカブセルホテルにどまつたのわいいが、  
あまり金がない。墨田区役所にたのもしかないと思  
い、三階のまちあいしつで待つあいだ、アルコール  
依存症の病気のボスターが目にとまる。読むとびつ  
たり。すると担当の丁さんが、わらいながら見てる。  
おれわ、さつそくアルコール依存症の病気をいつ  
た。返事もない、おかしいなと思ひ、まあとにかく  
病気をおおしてくれるマックに相談にいつてみた。  
すると、手のふるえがひどい。おかしいな、酒のん  
でないのに。

すると大きな男が見えた。

いろいろ話してみた。大きな男がおれもマックで  
アルコール依存症の病気がなおつたといった。

話しかなどしつかりしている。おれもこんな人物  
になりたいなと思つた。

大きな男が君わ病気だ、面倒みるといつた。する  
と墨田区役所の丁さんに電話してくる。かお色でわ  
かる。面倒みないそうだ。

Tの青ニ才あたまにくるな、二人でTのわるぐちばかり。それより、こまつたな、はたらけないのに、くよくよしてもしようがない。こじきやるしかない。かくごを決めた。

浅草の生活一ヶ月、錦糸町公園二ヶ月、山谷二ヶ月。

すみだ公園にいる時、大田寮にいって、足をなおすしかないと思い、すみだ区役所に大田寮の募集、きいてみた。

五月二十七日九時に行くと、六ヶ月経過してないのでだめ、六月二十九日（火）いくとやつと大田寮入所できることになつた。

六月三十日午後三時入所、秋葉本部長のかおみて安心した。



### 現在生きている食乞神

社会学。みんなどんな神をもって  
産まれてきたのか、寄せ場  
宿命といふ。俺はお金かほい  
金かほいといふのに、宿命といふ  
食乞神か。七刀切っても七切れね  
“いやで足をひっ張はなくくる。  
ウ”

### 地獄の季節

雨が降っても、雨がある日も  
外で野宿する。家がある日もある  
日を夢みない

猛暑が続く夏には弱い私は早くも夏ばて状態の毎日だ。軽く夕食を済ませた後は、いつもきまつて縁側に出る。部屋の中にはいるよりもいくらか風が吹き、出た途端になぜかホットする。蚊取線香を焚き一と息つくと共に煙草を一服。幸福感が漂よう。軒に吊るした風鈴の音と庭に植えし風船かつらの青そのものの色鮮やかさと黄色の風車、その風車がくるくると廻る音と風鈴の音とが夏の夕暮れの暑さを忘れさせてくれる風流な一齣である。

どこからかすかに太鼓の音が耳に入る。近くの校庭から盆踊りの囃子も聞こえる。夏と云えば海と踊りと祭である。私は幼子の頃から、祭りが大好きである。亡父に手をひかれ浴衣姿で町内のまつりに出かけたものだ。夜店に立ち寄り綿菓子を頬張り、かき氷を喰べ、金魚すくいを只一つの楽しみで祭りの来るのを折り数え幼な心にも待ち詫びたものだ。特に金魚すくいは苦手で紙網が破れても破れても飽きる事なくやつと一匹見事に手にした時その快感が何んとも云えなかつた。あの頃の忍耐力と努力さえ忘却していなければ私の人生も変つていたかも知れない。

## 夏まつり いさむ

夏まつりと云えば、新宿連絡会が主催する野宿と共にボランティアが活躍する中央公園での新宿夏まつりが何処の祭りにも負けない天下一品、これが人として眞の祭りである。汗と期待と未来を夢に託した祭りと言つても過言ではない。野宿と共に喰べ飲みさうして音楽を楽しみ、踊りお互い一人一人の絆に酔ひ明日の生命力に賭ける。夏の宵の一と時は、何をも語る言葉さえない。人道無限そのものの姿だ。

昨年の新宿夏まつりには身体の調子が悪く参加する事が出来なかつたが、その前の祭には参加する事が出来た。雨が時々そぼ降る中、仲間達が雨の中にも拘わらず風船割りや西瓜割りなど楽しんでいる姿がいじらしく頭が下がる思いであつた。小雨の中私は仲間が段取りをしてくれた太鼓を叩き出すと、待つてました！と云はんばかりに太鼓の音に合わせ群衆の中から数人、いつの間にか小さな輪となり仲間達が踊り出した。太鼓の音も叩き出しより調子も出て来て、足並みも軽く無邪気に東京音頭を都庁まで届けと云はんばかりに：

：私は太鼓のバチと共に私が叩く事によつて  
皆んなの楽しそうな顔が走馬灯の如くに私の  
過去さえ忘れさせてくれる。

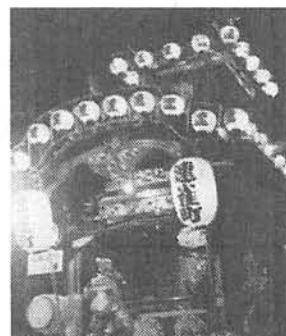
一度止んでいた雨も降り出し短い時間では  
あつたが盆踊りは中止になる。でも私は雨を  
恨みがむしやらに太鼓を打ち続けた。

小雨の中一人一人の立ち去る姿が明日に希望  
を描いているように思え、私も負けてはな  
らない何事もと反省し、夏まつりと云う行事  
に協力してくれた仲間、支援者達に「ありが  
とう」とつぶやき乍ら帰途に着く。

その思い出深い夏祭りが後数日にやつてくる。  
身体さえ良ければ、又仲間達と踊り度い  
唄ひたい。

新宿まつりが来て、あ、今年も生きる事  
が出来た、生きると云う嬉しさは新宿夏祭り  
を生命と思っているのかも知れない。

今夜も暑くて眠れそうもない。過去の露宿  
に記載された仲間達の投稿文を読んでみよう  
かと思う。投稿文の中から何か得る事が出来  
るかも知れない。では仲間達と新宿公園で会  
える日を楽しみに：



今年また

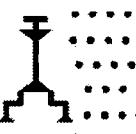
太鼓の音に誘われて  
仲間が集う 新宿公園

野宿者と 支援者達が  
輪になつて  
なごやか踊る 東京音頭

## ジョーンズの豆の木2



秋戸 空



其處からどうやつて  
豆の木は、育つことが

出来るのだろう

そこえお母さんが来て  
「なにをぐづぐづしてゐるの

ピゴ、早くストーブを

焚いておくれ！

のびかけた豆の木

なのに・・・

ジョーンズの豆の木は

（屠殺されてしまつて）

（高見順詩）

貧困そうな少年は、  
ふんわりとしたチップを

集めて貧しい家のストーブの

焚き付けにしようと

彼ら（木々の・・・）の上に立つた

のだ

細い煙突をつたつて  
細い煙となつて・・・

少年の家の中を  
入れたのだった

細切れにされた豆の木（詩）は

ジョーンズの豆の木

チップにされてしまい

ある公園にまかれ

しまつた・・・

豆の木（詩）の考え方、まったく

見えない、読むことすら

出来ない・・・

何處え行つてしまつたのか

よく見てみると沢山の

詩のこまざれが・・・

チップにされて

皆もしらずに毎日

踏みつけていたのだ

少年は、そのチップを

沢山拾い集めて来て

少年は、ジョーンズの豆の木を

夢視ていたのだった

このチップの中に

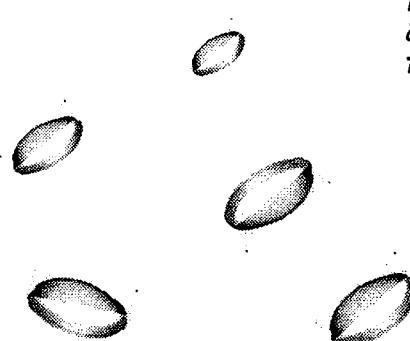
豆の木の種は

ないだろうか・・・と

ストーブに入れる前に

かき回しながら

捜しまわつていたのだ



陰

陰

'01 7 31

秋戸 空

そう、いつも休みたいと想うが

僕は、海も山も知らない・・・

僕の歩く道に陰（シミ）を点々と創る

アスファルトの道

病んでいるばくだが

道を歩いていても

どうしてもいやになってしまふ

だけれど、しかし立ち立ち止まれない

アスファルトに陰（シミ）を落とし

ながらも

僕自身のためよりも

僕の足のために歩かなければ・・・

ならないのだ、友よ

君は、なんと健康な事だろう

（高見順詩行）

それでも僕は休めないのだ

陰（シミ）は、常についてまわる

僕の影は、たつた一つきり

そうだ、僕は、その陰（シミ）を

追いはらいたいのだけど・・・

僕は、海も山も知らないのだ

僕は、海も山も知らないのだ

僕は、海も山も知らないのだ

僕は、海も山も知らないのだ

僕は、海も山も知らないのだ

僕は、海も山も知らないのだ

僕は、海も山も知らないのだ

僕は、海も山も知らないのだ

僕は、海も山も知らないのだ

街

何故そういう風にしたのだ！！！

そんな必要もなかつただろうに・・・

行政権力

ヤツらは平気な顔をして  
大きな消しゴム持つて来て・消し  
た！！！

た！！！

街

消されてしまった街

現実に存在しているのに

ヤツらは

大きな消しゴム持つて来て・消し

地図の上からも

街の名を、生きている街なのに

全て消してしまったのだ！

それぞれの歴史を築いて来た

街なのに・・・

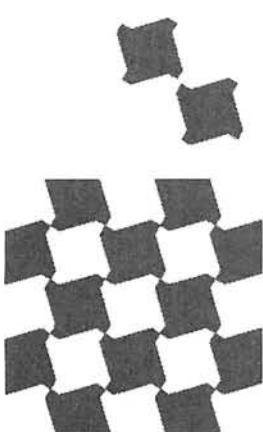
誰もとやかく言えない街なのに

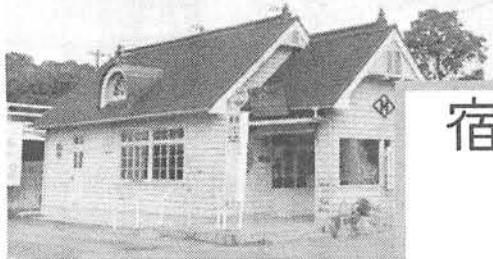
町名をかえるために・・・

街なのに・・・

生、や歴史を生きて

ささえ合って来た街





## 宿無しの散歩道

(特攻の常さん～2～)

中津川あゆみ

霞ヶ浦の教員修練所は、予科練の学営舎の隣に在った。

中村は教員訓練と聞かされていたので、教員に成る為の教習を受けるもの、とばかり思っていたが實際は、航空図の測り法と、新しいコンバスの使用方法など、中村にとって既に知り尽くしている事を、一週間程度先輩の教官から教わっただけであった。他には、学生への教育の方法や、規則を破つた者に対する罰則と、その体罰の種類と方法など、教育とは程遠いものばかりであった。

七ヶ月間の教員課程訓練と聞かされていたが、十日も過ぎた頃には、中村は教壇に立つていた。ほんの四ヶ月前には自分自身も目の前の机に座つて、ペンを取つていたのである。

昔から、「先生と呼ばれる程の馬鹿じゃない」とか、「先生生徒の成れの果て」などと教師を詰つた文句が有るが、中村は、自分が教壇に立つて初めて、「その種の言葉に嘘は無い」と、実感した。何故なら、教員とは、唯々自分が教えて貰つた事柄を、そのまま鶴鳴返しに教えればいい事であつた。

生徒達より一段高い教壇に立つと、驚くほど教室の中がよく見渡せるものである。

霞ヶ浦の教員修練所は、予科練の学営舎の隣に在つた。

中村は教員訓練と聞かされていたので、教員に成る為の教習を受けるもの、とばかり思っていたが實際は、航空図の測り法と、新しいコンバスの使用方法など、中村にとって既に知り尽くしている事を、一週間程度先輩の教官から教わっただけであった。他には、学生への教育の方法や、規則を破つた者に対する罰則と、その体罰の種類と方法など、教育とは程遠いものばかりであった。

七ヶ月間の教員課程訓練と聞かされていたが、十日も過ぎた頃には、中村は教壇に立つていた。ほんの四ヶ月前には自分自身も目の前の机に座つて、ペンを取つていたのである。

昭和十九年十月十八日、陸軍省は兵役法施行規則改正を公布し、十七歳以上の男子を兵籍に編入した。その二十四日、日本の足掻きを嘲笑うかのように、フィリピン沖で海戦が始まり、また沖縄の、東シナ海上はぞくぞくと米艦船が集結していた。

秋の気配が予科練の隊内にある桜の木々を揺らし始めた頃、あの井上から一通の手紙が届いた。

教官の講義を一生懸命に質疑帳に書き取つてゐる者、午前の体力修練に疲れて夢中に居る者も多い。しかし、中村は居眠り等を見付けても、決して起こしたり、又、その事を罰したりはしなかつた。それは中村の優しさからものであつたが、その事が意に反して、効果を上げた。生徒達は、本來怒られるはずが、何の罰も受けない。その事に感謝するよりも、自分自身を恥じて、次の授業からは、決して眠るようなことはなかつた。

教官とは言え、楽な訳ではない。体力修練の持久走の時などは、生徒達と一緒に十キロ、隊内の四百メートルグランドを二十五周も声を掛けながら延々と走るのである。その辛きたるや、志願した事を後悔するほどである。

気が遠くなるような暑い夏も過ぎ去り、秋の気配が予科練の隊内にある桜の木々を揺らし始めた頃、あの井上から一通の手紙が届いた。

几帳面な井上の性格を垣間見るような、  
丁寧な筆跡がそこに並んでいた。

拝啓、中村先輩殿。如何お過ごし  
の事でしょか。もつと早くペン  
を取る積もりでありましたが、元  
來の不精癖故、まずはお赦しくだ  
さい。

小生は、やつとの思いで飛行練  
習課程を修了し、山口県の岩国に  
有ります「吉川航空隊」へと配属  
が決まりました。まずは先輩にお  
誉めの言葉を頂戴致したく、一筆  
啓上いたした所存であります。

父は町内会の仕事が忙しいらしく、  
共に来る事が出来ない、とのこと  
でした。小生とて、あの口喧やがま  
い親父殿と顔を会わすのは、真っ  
平御免であります。

話は変わりますが、面会に来て

くれたのは二人だけではありませ  
ん。恥かし乍ら、小生には「千恵」  
という許婚よきみが居ります。小生の口  
から言うのも何ですが、優しくて、  
美しく、誠に可愛い女性であります。

小生が予科練に志願する旨を皆  
に告げた時、「仮祝言でも挙げろ」  
と皆から催促を受けましたが、小

生は断りました。勿論、千恵さん  
が嫌いな訳ではありませんでし  
た。それどころか、小生には不相  
応と思つた程であります。しかし、  
これから死に行く者に、どうして、  
あの人を愛せましょうか。どうし  
て幸せにする事が出来ましょか。

大きな声で言う事は出来ません  
が、小生は、お国の為ではなく、  
名譽の為でもありません。唯、千  
恵さんと、母上達を守る為に死ぬ  
のです。女々しい事とお笑いに成  
られるやも知れませんが、先輩以  
外にこの気持ちを語れる人は居り  
ません。何卒ご理解頂ければ幸せ  
です。

母は、「身体に気を付けるので  
すよ」と、淋しそうな声で言いま  
した。小生は、どの様に答えまし  
ょうか、その術も無く、唯、黙つ  
ているしかありませんでした。

千恵さん達は、夕食ラッパが鳴  
ると、追い立てられるように、帰  
つて行きました。千恵さんは最後  
まで笑顔を絶やす事なく、千人針  
を置いて行かれました。その心中、  
夫婦になつて、幸せな日々と、耀く未来が

察するに余る処であります。

その夜、小生はひとり営舎の外  
にて、男泣きをしました。

小生は弱虫であります。

小生は泣虫であります。  
言つてはならない言葉と知つて  
は折りますが、『戦争さえ無かつ  
たら』と、思わない日はあります  
が、たとえ非国民と呼ばれようと、

小生の今のこの気持ちが変わること  
はないでしょ。

先輩、本日は愚痴ばかりを記し、

申し訳ありませんでした。しかし、

小生にとつてはこの手紙を書いた  
お陰で、気持ちが少し落ち着いた  
ような気がします。岩国に着任し  
ましたら、またペンを取ります。

これから涼しい日々が続くもの  
と思います。季節の変わり目は、  
何かと身体を壊し易いと聞き折り  
ます。

先輩に於かれましては、くれぐ  
れも御自愛なさりますよう。

乱筆乱文お許しの程

井上

中村は、井上の手紙を読み終えると、大  
きな溜息をついた。(そうだ、そなんだ  
だ。こんな戦争さえ無ければ、あの二人は  
夫婦になつて、幸せな日々と、耀く未来が

待つてゐるはすなのだ) 中村は教官室の机に両肘をついて頸を抱えた。

昭和二十年二月一日、未明、霞ヶ浦航空隊の空はまだ黒く、ヒラヒラと白い牡丹雪が舞つていた。予科練の蒲鉾形兵舎の屋根に積もつた雪の滑り落ちる音だけが、凍ついた練兵場に静かに静かに音を立てた。

「第二十四期、予科練飛行生、二十七名、整列完了致しました」

冷たい空気を切り裂くように、中村の大聲が練兵場に響いた。

中村以下二十七名は直立不動の姿勢で、グランドの中程に置かれた木作りの演台を見詰めていた。全員国防色の飛行服に身を固め、黒い半長靴は、白みかけた東の山の稜線のように、薄つすらと輝いている。防風メガネと耳当ての付いた飛行帽は深々とその頭を包み、首に巻いた憧れの白いマフラーは、若者を嫌が応でも奮い立たせるよう、ふしぎな魔力を持つて、その首元に光つていた。

「諸君、もうすぐ朝日が昇る。その輝ける朝日は、諸君達のものだ」  
予科練指令長は、中村に勝つとも劣らぬ大声で話し始めた。

「皆も既に承知のようすに、今、我が国は混迷の極みにある。この国難を開拓するのには、諸君等の熱き血潮のみである。我等帝

国海軍は、その総力を以て、鬼畜米英に対し、大和魂の真髓を示す時が来た。もはや、躊躇の時は過ぎ、この肉弾を以つて祖国を守るのみである。諸君等の活躍とその吉報を待つてゐる」

「〇五二〇時、輸送機一七三に搭乗せよ」  
指令長が演壇を降りる時、左膝に下げたサベルが階段に触れた。いつになく緊張しているのが皆に判つた。

「全員、背嚢を纏め、搭乗準備急げ」「回れ右、目標、隊舎内、解散」

隊員達が蜘蛛の子を散らす様に走り去つたグランドに、中村だけが立つていった。中村は、白い雪の上に残つた、若い隊員達の残した足跡を見詰めながら、一人取り残される自分を、恨めしく思つていた。(また逝つてしまふのか) 何處にも当たることの出来ない遠く瀬無さだけが、中村を支配していた。

二十年初頭から、ボーイングB・29スープーフォートレス戦略爆撃機が毎日のようく東京上空に飛来し、空爆を繰り返してゐた。  
B・29は、全幅約43メートル、全長約30メートル、乗員10~14名、四枚プロペラの、ハミルトン・スタンダードエンジン四基を搭載し、その機の上部にニヶ所、下部にニヶ所、最後尾に一箇所の重機関砲を備えていた。その為、護衛機も必要とせず、サイパン島から二千六百キロ離れた東京まで、往復12~15時間、九トン

五時二十分、輸送機一七三型『霧生』は、飛行生十七名と教官三名を乗せて、朝焼けを背に受けながら、広島の基地へと旅立つて行つた。それは、紛れも無く『死での旅』であり、決して帰ることの無い、若すぎる旅立ちであつた。その中の一人に鈴木良平が居た。

中村は暇を見ては、生徒達に、「もし、

もの爆弾を積み込んで飛来して來るのであつた。巨大かつ高性能な爆撃機で、空の要塞と呼ばれた。

二十年三月六日、大本營は本土決戦に備え、国民勤労動員令を公布し、老若男女の別なく、病人までも登録を義務づけた。

その八日、中村は司令長室に呼ばれた。

(こんどこそは俺も飛べる。俺も逝ける)  
中村は喜んだ。(死ぬことが、そんなに嬉しいのか?)自分の心に問うたが、答えは出なかつた。しかし、見送り役はもう御免であつた。

「中村飛行曹長入ります」

「よし、入れ」

司令室に入ると、中村は我が目を疑つた。  
室長の机の前には大きな丸いテーブルが置いて有り、その上には、立派な鯛の尾頭付と、沢山の煮付けにフルーツまでが並んでいた。そればかりか、焼酎やウイスキーまで有るではないか。

「どうした中村、驚くことは無い。今日はお前の為のお祝いだ。マツ、座れ」立っている世良善行少佐が椅子を引きながら言つた。

中村は言われるままに椅子を下ろした。  
正面には山本連隊長、右には木下指令長、左には中村の指導に当つた葦澤博文教育長が座つていた。世良少佐の他に、高射砲

隊々長と整備長の重黒木一雄少佐が立つてゐた。中村は、(階級の低い自分が座つてゐるのは間違い)と、立ちあがつた。すると、

「中村、気を使うな、今日からはお前が上官だ」と、重黒木少佐は、今時珍しい銀縁の眼鏡を、右小指で押し上げながら言った。

中村にはその意味が理解出来なかつた。  
「中村、お前は今日、たつた今から中佐となつたのだ。つまり、俺にとつてお前は上官だ」

「自分が、ありますか?」

「そうだ君は今日から中佐に昇格となつた」葦澤教育長が中村のグラスに焼酎を注ぎながら話し始めた。「君は、この予科練の教員課程始まって以来の秀才である。二十一歳の若さで飛行教員試験に合格したのは、君を置いて他には居ない。それは、私をはじめ皆が認むるところであり、私とても非常に鼻が高い。君にはこの霞ヶ浦で、このままもつと頑張つて欲しかつたのだが、・・・それだけが残念でならん」

「と、申されますと?」

「そこから先は私が話そう」山本連隊長が割つて入つた。

「とにかく、今日はめでたい日だ、サア皆、飲もうじゃないか」連隊長がグラスを上げると、皆同じようにウイスキーの入つたグラスを上げ、一気に飲み干した。

「オットと、中村は焼酎の方が良かつたな」

「噂はかねがね聞いておるぞ。一升くらいは朝飯前と言うではないか、ウン、頼もしい限りだ」連隊長は本題に入る事を躊躇つてゐるようであつた。

「連隊長殿、自分は、まだ飛べないのでありますか?」中村のグラスにはあらたに

焼酎が注がれた。それを又一気に飲むと、身を乗り出して聞いてみた。

「否、飛んでもらう。しかし、行き先は鹿児島だ」

「鹿児島ですか?」

「そうだ、鹿児島の知覧飛行学校へ教官として赴任してもらいたい。これは、軍幕僚からの直々の命令である」「勿論、きみに一人で行けとはいわない。整備長の重黒木少佐も一緒に行つてもらう。これは、重

黒木のたつての申し出によるものである。明後日、午前六時、離陸せよ」

知覧飛行学校といえど、三年前に開校されたばかりの新しい航空隊で、「知覧に行けば必ず死ねる」と、言われるほどの『特攻隊員養成所』であつた。

#### 『第四部』

三月九日の朝は、空襲警報のサイレンで目が覚めた。まだ四時半であつた。

中村は慌てて軍服に着替え、半長靴に足を入れた。（これでは、明日の出発は無理かもしらんな）焦りながら半長靴に紐をしていて、扉をノックする音がした。

「誰か？」

「伝令の清沢軍曹であります」

「よし、入れ」

清沢軍曹は直立のまま、手に持った一枚の紙切れを、口早に読み上げた。

「山本連隊長より通達」

「中村中佐及び重黒木少佐は直ちに、連隊長室に急行の事。以上であります」

「判つた。直ぐに行く」

中村は半長靴の紐を結び終え、立ち上がつた。部屋の中が散らかっているのが少し気になつたが、ご安心を。清沢軍曹はそう言つて敬礼をした。

「ウン、頼むぞ」

外に出ると、急に雨が降つてきた。

練兵場を通り抜け連隊長室に駆込み、既に重黒木少佐は軍服の肩を濡らして立つていた。

「朝早く起こして申し訳無く思う」連隊

長はまだ寝間着のままであつたが、「今、入つた無線連絡によると、東京は今、未明より激しい空爆が続いているらし

い。大本營の諜報部によると、明日はもつと激しさを増す、との見通しだ。したがつて、明日君達を送るのは極めて難しいものとなつた。しかし、遅らせる事は出来ない。先方では、今か、いまかと、首を長くして待つてゐるのだ」「そこで、君等には、今夜半飛んでもらいたい。」「君等には、たとえ一日でも身体を休めて貰おうと思つていただが、何分急を要すこと故、承諾してほしい」

中村達は、「霞ヶ浦から大阪の航空隊経由」という当初の計画を変更し、敵の空爆の裏について、北北西に進路をとり、新潟上空を日本海に出て、島根県の出雲航空隊を経由し、鹿児島の知覧に向かう事になつた。

その日の中村の日誌には、『三月九日金曜日、雨後晴。予科練に落日照る。風ひようひようと隊内を吹きて、堀の陰、溝の中に、残れる雪に日は射せど、風凍りて溶くるすべなし。午後より雲出す。夜また晴れて星凄し。耳切れて落ちんばかりの寒さなり。連日B-129夜に襲う。未曾有の国難眼前にあり』と記してあつた。

十三時を少し過ぎて、中村が乗り込もうとした時、世良少佐と葦澤教育長がやつてきた。

「中村、今生の別れに、お前に一言いつておきたい事がある」葦澤が真顔で言つた。「お前はたしかに秀才である。しかし、人間に完全な者はいない」「お前に欠けているものが有るとしたら、それは、酒の飲み方だけである。今のような呑み方をしていたら、俺よりも早く死んでしまうぞ。マツ、向こうへ行つたら酒など呑む暇もないだろうがな。老婆心と思つてくれてもかまわない、心の片隅にでも置いておけ」

「離陸準備ヨシ、搭乗急げ」「閃光」の機長、山野辺が大声で言つた。

「山野辺うるさいゾ、馬鹿野郎！」世良少佐であつた。「中村中佐、俺は葦澤のような野暮つた事は言わねえよ、これを持つて行け、道中は長い、途中、重黒木と呑んでくれ」そう言つて、新しいウイスキーを二本くれた。

『閃光』の機体が二千メートルほど昇ったところ。西の空がピカピカッと線香花火のように光つた。東京への夜間空爆であった。

離陸して二時間ほど経つた頃、「山野辺機長、今はどの辺か？」中村が聞いた。

中村達二人、衛生兵六人と、重黒木が用意した、発動機の部品とその工具を乗せて、小型輸送機『閃光』が飛び立つたのは、二

「只今は、北緯三十七度五十分、東経百三十七度四十分を高度六千で航行中であります。

「それでは、もう日本海の上か?」

「ハイ、能登半島の祿助剛崎、北二マイ

ル上空であります」

「それでは、下の雲厚はどの位か?」

「ハツ、雲上まで約三千五百、雲厚は三百程と思われます」

中村は迷っていた。

「オイ、どうした。中佐殿。何か気掛かりな事でもあるのか?」重黒木が心配そうに尋ねた。

「いや、：・最後に本土を見ておきたい、と思いまして」

「おお、それはいい、そうしよう」重黒木が、「オイ、へぼの山野辺。機首を少し下げる」と、大きな声で言つた。

「重黒木少佐、申し訳有りませんが、本機の指揮権は、自分と中村中佐だけであります」山野辺の毅然とした返事が返つて来た。

「へん、小生意氣な野郎だ」「オイ、中村中佐殿、お前の命令しか聞けないとき」「よし、判った」「山野辺機長、機首を南西に向け、目標雲下、高度二千五百まで降らせよ」

「雲下二千五百、了解、降下します」山野辺は操縦桿をゆっくりと前に倒した。

衛生兵を出雲で降ろし、九州の福岡沖の玄海灘を南下し始めた時、機関士の神谷が、

眼下的雲を抜けた時、重黒木が大声をあげた。

「あれは何だ!」遙か南の空が、まるで夕焼けのように赤く染まっていた。東京であつた。

(皇暦二千六百五年もこれまでか) 中村は目を開じた。

昭和二十年三月十日、その日、午前零時ころより三時頃にかけ、B-129約百五十機が飛来、東京に投下された焼夷弾は、約千七百トン、百万人が焼け出され、死者は十万人といわれた。日本の家屋の多くは、木と紙で造られているので、焼夷弾は、爆弾を落とすよりも効果的であつた。

「山野辺、高度元。目標、出雲航空隊」

「目標、出雲航空隊。了解」

さすがの重黒木もショックだつたらしく、「中佐殿、先程の世良少佐の手土産を開けませんか?」とかされた声で言つた。

「うん、遣るか」栓を抜いてもコップがない。ラッパ呑みである。重黒木はゴクゴクと喉を三回ほど鳴らした。他の衛生兵にも進めたが、「出雲に到着後、すぐに任務がある」と言つた。中村は、ウイスキーの瓶を口にすると、一気に三分の一程呑んでしまつた。

「戦闘機らしきものの、三機接近せり」と、山野辺に告げた。

「敵機か?」

「まだ判りません」神谷はレシーバーを耳に押し付けて、必死に機種を割り出そうと努めていた。

「中村、お前、どう思う? 敵か、それとも友軍機か?」重黒木は中村の足を右手で搔きながら聞いた。しかし、耳を澄ますにも、輸送機に防音設備など有るわけはない、両翼の発動機の音と振動で、機外の音など聞こえるはずなどなかつた。ただ言えるのは、もし、敵機であれば間違い無く墜される。と、いうことだけだ。東の空は



既に明るい。

「神谷、探索から受信に切り替えてみろ」

山野辺が振り向きながら指示した。

乗員すべてに緊張が広がり、二分が経過した。

「機長、友軍機であります」レシーバー

を耳に当てた神谷の顔が明るくなつた。

山野辺が拡声器のスイッチを入れた。

『閃光、閃光、聞こえるか。こちら大村、

十二連空、三五二航空隊。こちら大村、三

五二航空隊。私は大上中佐である。閃光、

入感あらば応答せよ』『繰り返す。閃光、

入感あらば応答せよ』

「こちら閃光、感度五で入感、三五二、

大上中佐殿、どうぞ」

『こちら、三五二。軍命にて、貴機を知覧まで警護する。尚、同乗せる中村中佐當て、伝言有り。「武運長久、心より祈る。霞ヶ浦予科練一同』以上』

「こちら閃光、伝言了解した」

大村湾を抜けて、右に五島列島が見え始める

めると、そこは既に警戒空域であった。

「山野辺機長、返電を頼む」中村は立ち上がり、腰に両手を当たた。

「返電、了解。どうぞ」

中村は、機震えんばかりの大声で、マイクロホンに向かつた。

「伝言、有り難く頂戴した。また貴けい殿達の警護、これに勝る贈り物無し。我等、

敬礼を以て、感謝を憚らず。この旭日(ひばる)に勇戦を誓う。以上』

『中村中佐、返電確かに受け取つた。帰還次第霞ヶ浦向(むか)け、電信送るを約束する。』

『尚、これより先、敵哨戒機によつて通信を傍受される恐れ有り。因つて、この通信を最後とし、後は、手信号にて通達する。』

『三五二』

『三五二、手信号の件、了解した。これにて通信を終了する。こちら閃光』

『第五部』

大刀洗陸軍飛行学校知覧分校に到着する大上中佐殿、どうぞ』

『こちら、三五二。軍命にて、貴機を知覧まで警護する。尚、同乗せる中村中佐當て、伝言有り。「武運長久、心より祈る。霞ヶ浦予科練一同』以上』

「こちら閃光、伝言了解した」

大村湾を抜けて、右に五島列島が見え始める

めると、そこは既に警戒空域であった。

「山野辺機長、返電を頼む」中村は立ち上がり、腰に両手を当たた。

「返電、了解。どうぞ」

中村は、機震えんばかりの大声で、マイ

クロホンに向かつた。

「伝言、有り難く頂戴した。また貴けい殿達の警護、これに勝る贈り物無し。我等、

中村達を迎えた。

海軍と陸軍は、犬猿の如き仲の悪い存在であつたが、混乱したる現状から、そんな事は言つてはおれなかつた。陸軍が海軍に對し、頭を下げて中村達を呼んだのであつた。

「遠くから來てもろち何も出来ん、本当に申し訳んなかごたる。じゃどん、君達の宿營舎(しゆぎやうしゃ)はキチンとしちよるでござす。安心して頑張って欲しか」

元軍医上がりの竹内少将は、戰術や飛行機に関しては、まつたくの素人(そじん)であつた。

中村達に宛(あて)がわれた營舎はへ他と同様丸木で出来ており、屋根と壁は矢張り同じ

ように偽装網で覆われ、まるで、ジャングルのようだ。部屋の中は、特別にベニヤが

打ち付けあり、その上を白いペンキで塗り固めてあつた。ベッドが二つ、机が二つ、それにハンガー掛けの付いた衣装箪笥(いとう)らしき物が、部屋の窓際に置かれていた。

「オイ、オイ。あの白髪爺(しらひやじ)が『キチントして』と言つたのがこれかよ。まつたく、

陸軍のセンスを疑いたくなるぜ」重黒木がぼやいた。

「重黒木先輩、ぼやくのは止めましょ。これからは死ぬまで我々の棲家(すみや)になるのですから」と、言いながらも、中村も少々落胆していた。

「中村、始めに言つておきたい事が有る」

重黒木は整備用の工具を点検しながら言つ

た。

「何でありますか、重黒木少佐殿」

「それだ、それ。その『殿と先輩』は、金輪際、俺に對して使つてはならん。お前は俺の上官なのだ。分つたか?」「俺もお前のことを『お前』と呼ぶのを止める」

「しかし・・・」

「しかしも案山子も無い。いいか、中村」と言つたところで、「アツもとい。中佐殿」と重黒木は言葉を改めた。中村はそれが可笑しくて笑つてしまつた。

「これからは今までのようには行かん。中佐殿の相手は飛行生ばかりではないのだ。この航空隊には沢山の教官が居る。その總てが古狸であり、俺と同じように歳もうつと上だ。しかし、これからは君が上官になるのだ。なめられてはいかん。その事を他の者に分らせる為にも、お前は、否、中佐は完璧に俺の上官であらねばならん。構わん、これからは俺を呼び捨てにしろ」

中村は重黒木の心根が嬉しかつた。

「分りました。決して陸軍の奴等になめられるような態度は取りません。有難うございます、重黒木少佐殿」二人して笑い出した。知覧での第一日日の始まりであつた。

当時、知覧には、百三十名程の特攻志願航空兵が居た。その内、熟練した者が二十名(三六四航空隊)と、なんとか飛べる

者が四十名程(三六五航空隊)、残りは一度か二度飛んだことがある、「飛行機乗りの玉子」まで達しない、という程度の者達(三六六航空隊)であった。

いつでも飛び立てる者達は、下士官の曹長や軍曹の指揮下に有り、中村にまかされたのは、玉子達であつた。しかし、そこにもう一つ問題が待つていた。七十人からの飛行生に、短期間で飛行のイロハを教えるには、あまりにも練習機の数が足りなかつた。

「イヤー、まいつたよ」夕方、宿營に帰つて来た重黒木が、溜め息を吐くように言つた。中村は机に向かつて日誌を書けていた。

「先輩、どがんしたとですか?」

「その、『先輩』は止めろ」重黒木は中村の机の上に置いてある湯飲み茶碗を取り上げると、中村が注いだばかりの焼酎を半分飲んで、

「まったく成つてないよ知覧は、何にも無いんだ。何にも」そう言つて、ベッドに倒れるように、横になつた。

「重黒木先輩、いったい何が無かとですか?」

「何もかも、全てだ」重黒木はベッドから起き上がるとき、自分の茶碗を取り出して、

「まだ有るか」と、聞いた。

「はい、たしかに知覧には何も有りませ

んが、これだけは沢山有るようです」

中村は、軍曹達が「歓迎の気持ちだ」と

言つて呉れた焼酎の一升瓶を指差しながら答えた。八本有つた。

「おおツ、なかなか、こここの奴等も気がきくじやないか」重黒木はその中から一本取つて、大きな湯飲みに並々と注いだ。

重黒木が言つたには、発動機の部品やオイルなど、ありとあらゆる物が不足しており。それ以上に、整備兵が未熟で、とても整備員とは言えない。それにも益して、備品の整理整顿がまるでなつてない。と、湯飲みの中の焼酎が減るのに反比例して、愚痴の量は増していった。整備に関しては、「西の酒井、東の重黒木」と呼ばれた男も、部品が無くては手の出し様が無いようだ。

その頃、主要都市が相次いで空爆に曝されており、部品などの輸送も滞りがちで、修理用の部品類は、使えなくなつた零戦の残骸から取り出して再生していた。

「中村、お前の方はどうだ? オット、失礼しました中佐殿」重黒木は頭を搔いた。

「私の方もご同様ですよ、これから先が思い遣られます」

中村が日誌を書き終えた時、重黒木が神妙な顔で、言つた。

「中村、お前、聞いてるか?」

「何のことです?」

「東京の事だ」

「と、申されますと？」

「東京が空爆されてる事は当然知ってる事だろうが、……今回は駄目かもしけん……」

「エッ、そんなにひどかとですか？」

中村は立ち上がつた。

「ああ、昨日の内に、お前の居た台東区の浅草や、墨田区近辺は焼け野原となつてしまつたらしい。他の区の事はまだ分らないが、昨日、輸送機のなかで見た事を思えば、想像が付くだろ？」

「ど、何處でそんな情報を？」

「あれさ」重黒木は自分のベッドの横に有る、小さな木の箱を指差した。それは、重黒木手製のラジオで、「軍の物よりも性能が良い」と常日頃自慢していたラジオであつた。今は部屋の中に吊つてある短い空中線も、「明日は屋根の上に大きな奴を張るんだ」と頑張つてゐる。

「来た早々そんな事をして大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だ、俺は今日の昼から司令長の命令により『中佐』になつた。これで、俺とお前は何の気兼ねもいらぬつてことだ」「したがつて、俺様が空中線を張ろうと何をしようと、俺の判断という訳だ」重黒木は、機械をいじつている時が、一番気が落ち着く、と何時も言つてゐるが、なるほど、手先の器用な男である。

「じゃあ、中佐昇進を祝つて今夜も呑りますか」

「いや、今晚はまだ仕事が残つてゐるんだ。悪いがお前一人で遣つてくれ」

「まだ遣るのでですか？」

「ああ、明日飛ぶ予定の機が、まだ二機終わつていない。今晚中に調整を済ませておきたいのだ」明日は、十二名の隊員が特攻に逝く事が決まつてゐた。

「酒呑んで大丈夫なのか？」

「さつき言つただろ、俺様は中佐なのだ、誰も文句など言わんよ。逆に言いたいくらいだ。着任早々残業とは付いてないよ、まったく」「ラジオは点けて行くから、何か変わつた事が分つたら教えてくれ」重黒木は茶碗に二杯呑むと、タオルを肩に掛けて出て行つた。

重黒木が自分と同じ中佐に成つたことで、中村は少し気持ちが楽になつた。一日前まで上官だった先輩を、軍律とは言え呼び捨てる事は矢張り憚られた。

重黒木は、「昨日、浅草は焼け野原になつた」と言つていたが、あの井上の両親や許婚の千恵さん達はどうなつたのであろうか。中村は湯飲みにもう一杯焼酎を注いで、また一気に飲み干した。重黒木の点けていたラジオからは、聴き取る事の出来ない鹿児島弁が、途切れること無く流れていた。

二十三時、まだ重黒木は帰つて来る様子

が無い。中村は待つのを諦めて寝支度を始めた。その時、ラジオから臨時ニュースが聞こえて來た。聴き取れない方言の中から『東京ナヲモ延焼セリ』の言葉だけが、はつきりと聞こえた。

朝六時の起床ラッパとともに空襲警報が鳴り響き、飛び起きて窓を開けると、敵の偵察機であろうか、南の開闢岳あたりに小さな黒点が見える。

付隊（部隊付きの三六四航空隊）が直ぐに迎撃に飛び出したが、敵機は六千メートル上空を飛来して來るのである。零戦がその高度に達するには、早くとも九分程掛かる。仮に追いついたとしても、約二十五分という時間が必要となるのだ。したがつて、敵機は樂々とユーターンして安全圏へと逃げ去る事が出来、迎撃に出た戦闘機は空振りで帰つてくるのが常であつた。

知覧に来て、二ヶ月程過ぎた頃、中村は、重黒木に模擬操縦席を作つて呉れるよう頼んだ。実機による少ない練習時間補う為である。重黒木は「任せとけ」と、一つ返事で受けたが、何時も忙しそうに走り回つてゐる重黒木を思うと、急かすことは出来なかつた。しかし、その日から重黒木は三日三晩營舎に帰つては来なかつた。心配になつて、中村が格納庫を見に行

くと、「おお、待たせたな。今出来たところだ」と言つて、オイルで汚れた顔をタオルで拭いた。

格納庫の外の桜は、既に花を散らし、青い若葉を通り抜ける風が、心地よい皐月の朝であつた。重黒木の作った操縦シミュレーターは、中村ばかりか練習生をも驚かせるに充分な出来映えであつた。

操縦席は飛行不能になつた戦闘機の操縦席をそのまま使い、風防までちゃんと備わつていた。しかし、もつとも驚いたのは、操縦席の二メートルほど前に置かれた飛行機であつた。それは本物の二十分の一の模型で、操縦席に乗つた者が操縦桿を前に倒すと、尾翼の水平舵が下に動き、機体は機首を下に向けた。左足で踏棒を踏み込むと、模型の垂直尾翼の方向舵は左を向いた。その模型と操縦席は二十本ほどの細いワイヤーで繋がつていたが、かなり微妙な動きにも反応した。

今まで、一回の訓練飛行では、三機までが限度であつたのに対し、重黒木の作ったシミュレーターを使うと、全員での同時学習が可能となつた。

中村の下には、下士官が二名居たが、その下士官達も大いに喜んだ。今まで口ではどうしても表現することが出来なかつた技法も、シミュレーターを使うことで、意図

も簡単に教えることが可能になつた。また、練習生達も先を争うように、理解していくのである。

この重黒木が作ったシミュレーターは、瞬く間に日本全国の航空隊の知るところとなり、各方面から『設計図ヲ急ギ送レ』の電信が毎日のように届いた。陸幕僚からも、「東京に戻れ」と再三の命令が来たが、重黒木は頑なに断り続けた。この時、重黒木は大佐に昇格した。

「重黒木先輩、どがんして東京に戻らんとですか?」と、中村は尋ねたが、重黒木は「その内判るよ」といつて笑うだけであつた。東京に戻れば自由に機械の研究も出来るし、何と言つても「安全」であった。それに引き換へ、この知覧は名実共に最前基地であり、何時空爆を受けてもおかしくはない場所である。

「我知覧航空隊は皆も承知のようだ。本島上陸が本格的に始まり、五月七日にはドイツ軍が無条件降伏した、日本の立場は悪化するばかりであつた。この頃から知覧には多くの戦闘機や搭乗員が集結し、また数々の部品や弾薬が空輸されて来た。た者と、古い者との間で諂いが絶えなかつた。もともと小さな部隊に多くの人間が集まるのだから、仕方の無い事である。それは、食事から風呂の順番、訓練とその滑走路の使用状況に至るまで、ありとあらゆる事が争いの要因となつていつた。請來要因となつていつた。

「皆、よく聞け」中村は三六六航空隊百十二名全員を、隊舎の外に整列させて訓示をはじめた。

「我知覧航空隊は皆も承知のようだ。本島上陸が本格的に始まり、五月七日にはドイツ軍が無条件降伏した、日本の立場は悪化するばかりであつた。この頃から知覧には多くの戦闘機や搭乗員が集結し、また数々の部品や弾薬が空輸されて来た。た者と、古い者との間で諂いが絶えなかつた。もともと小さな部隊に多くの人間が集まるのだから、仕方の無い事である。それは、食事から風呂の順番、訓練とその滑走路の使用状況に至るまで、ありとあらゆる事が争いの要因となつていつた。請來要因となつていつた。

「立不動の姿勢を崩す者はいなかつた。」

知覧航空隊の中では、新しく赴任してき

# 怪男シリーズ

その一

## 女駆け込み寺 ～岩手県～

山下金七

作

怪男が泊つた寺の住職はさつそく怪男に寺の留守番を言いつける。優れた住職ともなれば、怪男がどんな者であるか、何を考えているなど観破できるものである。また怪男も何かしらの能力があつたればこそ、方々の寺でも治めてくれたのだろう。

我々から見ればその能力とは、妙に心の通じ合う狂人や浮浪者、変人、パン助、痴人。はては動物や妖怪。成仏できない靈達と、なごやかに話し合えること。そんな力が何んとなく雲水とみなされる所以である」と。

ところで坊さんの中には、修行して人並以上に賢いと同時に、同じくらい悪にも強い人格を兼ねそなえた者もあるのである。この住職も、何か含むところがあつて、怪男に留守番を頼んだのだつた。

その訳はこのお寺。かつての尼寺であり、通称女駆け込み寺。多くの不幸で

我らが怪物殿下、頭は僧形、顔は童顔。太い体にボロボロの着物、リュックを担いで方々を歩く、少々知恵の遅れた若者。岩手のとある小さな寺に泊めてもらつた時のこと――

な女性を救い、かつ身寄りのない女を葬つたりした曰く付きの寺。また、方々に点在する無縁仏や、供養塔などを集めてピラミッド状にした集合墓もあり、無名の尼僧が無名の人々を、身命を惜しまず供養した謂ある寺。にもかかわらず成仏できぬ靈はあるようで、靈格の高い者なら、この寺のいた所に、救つてもらいたいと願う、さまよう女靈が見えるはずである。ある高僧が言つたというが、頑固な女靈を成仏させ得るのは、やはり尼僧には無理があろう。と。がそれは百年以上も昔の話。今は同宗派の近隣の檀下の菩提樹となつてゐる。

悲しいかな我らが主人公、若者といふのかバカ者と言つた方がいいのか、分かることといつたら腹の減ることと、寒いこと、ネムイことぐらい。それを平気で人の前で行うから、側にいる者をハラハラさせ、イライラさせる。世話のひとつやふたつやきたくなるが、下手にそんなことをしようものなら、次から次へとしてやること、言ってやること、教え諭してやりたいことが山ほど出てくる。しかもこの男、ひ

## 怪男シリーズ

とつひとつ言つてきかせても、まじめ顔で聞いてはいるが、何ひとつ覚えない。やはりこうした根っからのバカ者は、始めから相手にしないことが肝要である。言うだけ腹が立ち、教えるだけ損をする。それでいてこの男、妙にスイスイと生きている。かえってガーラー言つたり、バカにしたり、人のためを思つて何かして上げる方が、人生うまくいっていないのだから、ますますもつて腹が立つではないか。りこう者がバカを見るとは、ひょっとしてこういうことなのではないだろうか。

人の女にしがみつく。ひとりひとりを撫でたり触つたり揉んだり掴んだりはでは抱きしめて無理矢理床の中に入れる。次には別のを引き入れ、前のやつは足で蹴り出しながらハメていると、臭いをかぎつけたか、声を聞きつけたか、闇の中にいろんな女達が現われてくる。少しづつ、モソモソと、土グモのようになサワサと、虫のようにゴソゴソと、ネズミのようにチヨロチヨロと、いっぽいに女達が這い寄つてくるのだった。誰もいない古寺の夜中にである。

怪男はそのように集まつてくる女達のことはつゆ知らず、女を下にしてさにふと目が醒めて、奇妙な気配に囲りを見渡すと、怪男が枕しているあたりに四人ほどの女が座つていて、じつと怪男の顔を見下しているではないか。ニタニタ笑つている者。切なそうに涙をためている女。媚びている者もある。妙にセクシーな妖気が漂つていて、久しく女を見てなかつた怪男のそれはドビーンといきり立つ。ここら辺が普通の男と正反対だ。實に変つてゐる。や前にハメた女までがもつともつとばかりへばりついてくる。

この頃になつて鈍感な怪男もやつとする激しい力に負けて、猛然と四

人の女にしがみつく。頭に血を上げていた罰だ。驚いて見上げると、六・七人の女達がくねくね体をくねらせたりよじたつり、のけぞつて腹をつき出してくる。バカな怪男、そのおぞましさにますますいきり立ち、今ハメている女はそっちのけ、そこに指を入れたり撫で回したりし始めた。何んせこんなメチャクチャなモテぶりは始めてだし、生涯あろうはずがない。ワナワナとほっぺたをふるわして絶喜する。すると女達はますます喜び狂い、どんなことでもさせるのだった。更にそんな助平な怪男に、足といわす手といわすしがみつき、吸いつく嘴みついてくる。足や背中に尻に陰部をくつつけてくるわで夢中になつている。だが何んと、部屋はギッチリと女性でうづまつてゐるではないか。若いのやら中年やら娘やら少女やら一が怪男、そんな女の顔をよく見ると、それら女の多くは恐しげな姿と顔をしていられた。恐しげというよりむごたらしい、痛々しい女達だつた。辛い生き方をしたであろうと思われる悲惨な姿。めくらの女、腕のない娘、顔半分焼け爛れた女、せむしの少女など一そ

## 怪男シリーズ

うした女達が、我も我もと怪男に寄つてくるのである。

さすがの怪男にも恐怖が走る。体力

でぬれぬれの両手を顔にあてて悲鳴を

上げた。一瞬女達は退いた。が、すぐ

にわきわきと近づいて少しでも男に触

わろうとやつてくる。まるで金目のも

のをむしりとりに入る乞食強盗のよう

に、異様な執念深い目つきで、今この

時を失えばもうチャンスはないのだと

した熱気をもつて迫つてくる。襲い

かかつてくる。ちょうど、スーパー

ターにむらがる女ファン達のように

否！女達ではない。女妾者・怨亡達な

のだ。死してなお欲情に狂つたバケ者。

それも膚の出た女、カサブタだらけの

者、髪をバサバサに被つた女、紫あざ

に腫れ上がつた少女、気の狂つたエロ

婆達なのだ。

怪男は逃げよう、と考える。だがど

こへ逃げられよう。十帖ほどの部屋は

女でひしめき合つていい。梅毒女がイ

ヒヒと笑つて抱きつくわ、柱の上ま

で登つて飛び降りつくる者、足を掴え

て引き倒そうとする大女——いつもニヤ

ニヤして物に動じない怪男も戦慄す

る。本能的に逃げようとあがく。

（殺される。殺されてしまう。妾者達

だ。逃げなくてはならぬのだ。早く、

怪男、目の前の女を殴りつけ、足に

絡みつく女を踏み、横にいる者を蹴る。

足にブジヤツとした肉の感触、ほお骨

のつき出た醜い女の顔（怪男は元来こ

うした女が好きなのだが）にドガツと

当るこぶし、だが不思議にも女は怒ら

ないし恐れない。殴られ踏まれるのが

嬉しくてたまらない面持で、もつとや

つてくれと、赤く腫れ上がつた顔で抱

きついてくるのだった。怪男の手足は

血まみれになる。いや痛くしびれ、脹

れ上がつてくる。着ている物もズタズ

タに裂かれ、むろん禪はない。

（恐しい！全身に鳥肌が走る。頭の毛

も逆立つ思いだ！）

ウワーッと大声で叫び、持ち前の怪

力で、女に足を取られながらも部屋を

出、無我夢中で本堂に辿りつく——

本堂の仏壇まで逃げて、暗闇の中に

じっと坐る阿弥陀如来に怪男、あろう

ことかしがみついた形で、お助け下さ

い、仏様。と祈り始めた。姿は僧形だ

がこの若者、一度も神仏に祈つたこと

などないし、崇めたこともない。寺は自分を泊めてくれる所としか考えていない。大飯食らいのバカ男だ。それが今、しがみついていた仏像から少しく離れ、平氣で五体倒地の祈りをしているではないか。

妙なことに、寺の中にウジヤウジヤとひしめく女靈達。本堂の中には入らない。いや入つてこれないので。今にもぶつ壊れそうなこの古寺の中で、そこだけが結界であつた。四角なそこを女達は取り巻いて恨めしそうにくやしそうに睨みつけている。さつきハメた女達もいるではないか。

祈りながらも怪男、女達が氣の毒でたまらない。ということはこの者、一心不乱に祈つておらず、未練がましく思つてゐるか、女の恐れがぬぐい去らないか、あるいは菩薩の慈悲心を起し、哀れな女妾者を済度しようと考えていたのか――

（ああやつて、このオラにへばりつき、愛されれば救われる、浮かばれると思つてやつてきたのか――決してオラを殺そうとしたんぢやないことは分かるが、不憫だ。惨らしい顔や姿を呪い、男に愛されないまま果てた女の執念。

## 怪男シリーズ

不幸を背負って駆け込んでも、成仏できなかつた女の姿なのだ。こんなオラを徳の高い僧侶と勘違いして頼みにきたとすれば大変ありがたいことだが、オラに人を成仏させる力などない。ハメれば天国と言うが、一回や二回ぐらいたゞ執着心の強い靈には無理だろう。幸福を何回もかみしめてこそ、己の恋情や妄執を燃やし尽して逝けるのだ。それにしても多すぎた。)

怪男、始めて真剣に仏に祈つた。不幸な女人の人を思い、何かして上げなくてはならないという思いが坐像の前に跪かせたのだろう。何時間も祈つた。やがて夜が明け染める頃、あれだけザワザワと這い寄ってきた靈達は消えてゆき、重苦しい空氣もまた晴れてゆく。その頃になつて人の悪い住職は、どちらともなく現われて、床に平伏して祈つている怪男の姿を見て大笑いをした。

「ワッハッハハハ——よく殺されなかつたのう。てつきり女靈にとり殺されているものと思つたのに、惜しかつたのう。ここで殺された男は何人もいたの

にのう。ワッハッハ——もつとも、死んだのは、女を騙したり食い物にしたり暴力いじめぬいたどうにもならん悪党共ばかりだつたから、女にへばりつかれた死んだことは、苦しんで死んだ女う——こりや怪男！」

「それでは住職は、あれ達のことを知つていて、わざとわたくし奴を留守番に？」

「もちろんそうじや。十中八・九まで殺される。当たり前じや。女の恨みは恐ろしいからのう。お前には色にまよつた女がきたらしいが、それも女に夢中になつてゐるうちはいい。いい気持で

成仏すれば男にとつても幸だ。だが恐怖が入つたら終りだ。幸に臨終を迎えた男もなく、女を成仏させた男もいなかつた。みな苦悶の相を浮かべて死んでおつた。フハハハハ——女達は男に縁お主はまだまだのようじやな。魔を退ける法も、結界を張る術も、祈る力も微力だ。この寺にしばらく居て、も

多い。だから女にバッタのようにむらがられて死ぬ——だがじや。この寺の門を叩いた者は、そのような因縁があつたからこそ、運命の糸に引きずられて逃げ込んだものだ。多くの男は恐れ寺とはそんな所。修行とは命賭けのものだ。それにしても、お前はよく本堂やられるものなに、ワッハッハハ——見やり方ではないか。

「しかし、御上人はいつも寺にいて」

「ワシは彼女等を少しずつ、少しずつ供養している。寺とは妾者の集う所。地獄の延長上にある。不幸にして死んだ人の数は砂の数。彼女らの直接的な願いなどすぐ叶えられるものでもないし、恨みある者を殺そうとする靈の望みは受ける訳にいかず、読經と祈りで少しづつ教え諭すしか方法はあるまい。もちろん、人を救おういう悲願が肝要じや。かといってありもしない肉体の女靈に現をぬかしてハメたりはせ

## 怪男シリーズ

つと修行してゆけ！

喝！

恐らくこの怪僧の気迫に腰をぬかしてしまったのが普通の若僧。ところが怪男、こうした力には意外に平氣。すぐ自分の胸のうちを述べた。

「めっそりもございません。夜な夜な女にへばりつかれましては、若草の身、とてもそのような法力など、身につきそうもありませんゆえ、これにて失礼つかまります」

「コ、コラッ！待て、待たんか！」

住職は怪男を捕まえようとした。わたしの一喝に腰が立たんはずだと踏んだ住職の慢心が、彼を掻える手に遅れをとつた。この男なら寺で十分に使えそうだと踏んでテストをし、見事合格した者。女靈を恐れたり、恨んだり軽蔑したりしないばかりか、喜んで相手をするような奇特な男。結果的に成仏できぬ女靈のため、身命を惜しまず働く者ではないか。

住職は思う。

（このようないボロ寺で、日本の長い女性蔑視の歴史の中を、苦しみぬいて死に、死してなお執着にあえぐ不幸な女性靈を成仏させ、鎮魂させるには、ワ

シひとりの力ではどうしようもないし、またいかげんな若僧に勤まるはずもない。大飯と女性とえておけば満足しているような奇特な、いい男を逃がしてしもうたわい）

怪男の方、ノーチで逃げて逃げて、隣りの県にまで行つてしまつたが、後日、その寺の女靈達のこと、住職の教え諭しなどを思い出し、惜しいことをしたるものだと考えた。

（でもあんなにいつべんに、我も我もとこられたら、オラもまいまいつてしまふ。それに、オラは美人だと十人並とかは好かん。面白くもない。心の底から熱く燃えてこないもの。やはり化物か、醜女がいい。男もそうだ。狂ったやつとか、変つているやつ、イカレている者でなくちや話が合わんし、面白くもない）

その二

## 猿と地蔵 ～青森県西津軽郡～



怪男が山道を歩いていると、道端の地蔵様のそばに、猿が何匹か集まって拝んだり、物を供えたりしているのに出合い、その信心深さに感動した。

同時にまた悪い考もおこってきた。彼はいつも腹をへらして旅をしている。猿達の拝む姿を見た時も腹ペコであつた。そこで、自分も地蔵のマネをしてみようかと思つたのである。ここからしばらく行つた所で、ひとつ、地蔵のマネをして立つてみよう。そうすればお供え物をしてくれるかも知れない。オラが山に入つたとしても、とても猿

## 怪男シリーズ

のようになんか食べ物を探せるはずはないのだから。

何しろ丸い顔にボーズ頭。デップリとしているし、腹も太いし、耳も大きな怪男である。薄らバカさかげんも手伝つて石仏に見えぬこともない。怪男、すぐに仕度にとりかかった。まずはどこかの寺でもらつたボロの衣をまとい、山道の辻を探して、棒切れを持つて立つマネだ。そして地蔵様になつた。しばらくすると、そこにやつてきたのがメスの未亡人猿。怪男を拌んでお供え物をし、

「いいダンナが見つかりますように」などと唱えている。怪男、笑いたいのをじつと我慢しているとメス猿、近くに誰もいないのを確かめると、「着物の下にズボンをはいた地蔵様なんて最近は珍らしい」などと言ひながら、「こんな不格好なズボンなんかなの方がいいな」と、そこをまさぐつてはクックッと笑つている。

怪男も生きている。ハラはへつても息子は元気。しだいに大きくなつてしまつて、しまつた！ 見破られたかな。これだけは自分の意志ではどうにもならないからな）と思つてしまふ。

メス猿は「こりや、たまげた」と言ひながら、なでたり頬づりしたりしてい人はおかしくて笑うのをこらえていたのだが、我慢し切れずに、普と笑つてしまつた。

さあ大変だ。猿達は驚いた。「地蔵様が笑つた。こんなはずはない。こりやニセ物だ」と口々にののしりわめいで、みんなして旅人を担いで、近くの崖まで運び、谷川にほおり込んでしまつた。旅人は、「あんなにいっぱいにこられたんじゃかなわない。メス猿一歩いて行くと、ひとりの徒步旅行者に会つたので、面白く愉快だつたその話ををしてやると、その男、目を輝かせ、息をはずませ、「それは面白い。オレもエクストリームな、アブノーマル、セックス、アビリアンスをしてみたいから、地蔵のマネをしてみる」と、聞きなれない単語を使つて、無理にも怪男の衣を借りて、喜んで行つた。

旅行者は、怪男が立つていたらしく所に、地蔵のマネをして立ち、メス猿はまだか、メス猿はまだかと待つていると、老若男女の猿の一行がやつてきた。「ここにもありがたい地蔵様がいるぞ」などと言ひながら、ゾロゾロと集まつてきた。その上、お経まで唱え、

(完)

# 歌集「馬捨山」より

四、野川

望月太成

PART I

今思えば馬のサーカス 綱渡り

野川の岸辺

綱渡り

小夜中にいなき一声 ポキリンコ

枝垂れ小松は

大雪の中

禊する闇夜の野川 橋の下

馬が馬人

拳銃で守る命の馬暮し

悪餓鬼天下

見張番して

小金井の町

打ちなびくすきが原に寝転びて

見上ぐる空に

馬いじめ サツの鑑は小金井署

見ての見ぬふり

葬儀屋の群

ワルの手助け

現世の天ノ川原は野川渕

織女、彦星

野川辺で路上暮しは命取り  
餓鬼の殺し屋

狸穴の奥

街に溢れて

警備屋もやくざも来ざり サツ知らず

まさか野川で

野川辺でにぎわう夜中の宴かな  
道場失せて

馬が修業は

名月の秋

神さぶる野川のほとり 白一重

道場跡は

雪に埋れて

たまさかに訪い行けば橋の下  
見知らぬ馬が

雨宿りして



強制アル中

路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

過ぎたれば野川の月も忘れたり

狸穴口は

草に埋れて

石川や 土々根を張る大根の  
強きに負けて

身の憂さを知る

悪餓鬼の襲撃あらば酒手なし  
枇杷の木の下

寝ずの番して

秋の夜の野川の月は寂しかり

宴の後の

馬捨の原

テント屋は裂けてズタ、天文台

餓鬼が宴の

狼藉の跡

たわけ言 誰や聞くらん 赤のれん  
枇杷の樹の下

住みしいわれを

かる鴨が二列縱隊 ひな十羽

二枚橋下

馬を無視して

今にして怖ろしものは小夜中の

雪の重みに

折れし松が枝

穢れたる卑しき民の野川水

清めの泉

糾すすべなく

ホームレス 主なき柿で餓えいやす

今は思い出

学園の森

多摩電の窓より見ゆる梅の花

造花の薰り

小金井の街

天文台 その崖下のテント屋に

鳴くほとゝぎす

朝な夕なに

人知らぬ野川の岸辺 あだ桜

死者の恨みを

花に咲かせて

しのゝめの雲井に映えて野川べり

禊の後の

暁の空

白玉の玉に手ぬれて里芋を

盗みし秋の

星屑の下

白玉をもろに背に受け里芋の

葉影に野冀

我ホームレス

桜花 咲けど興なき野川岸

我が屈辱の

日々を思えば

山がらす 黒き翼の不気味かな

黄泉路の使者は

学園の空

白玉をもろに背に受け里芋の

葉影に野冀

我ホームレス

桜花 咲けど興なき野川岸

我が屈辱の

日々を思えば

春待たず死にし三人は行倒れ

野川の水の

泡とかき消え

友はみな不当逮捕で堺の中

私はのう、

闇の道場

しがらみを越えて野川の渡り水

馬は住みけり

泉ならねど

ほとゝぎす その鳴き声に涙あり

悪餓鬼襲つ

テント屋の跡

街の灯を見れば悲しき一枚橋

夕餉の香り

たそがれの空

多摩川にオウム探しのサツの群

小屋掛住い

貧者見捨てて

我が氏の恥の勲章 二枚橋

記念碑建てよ

名は石原家

崖の下 ほたる養う市民あり

餓鬼が標的

テント屋の傍

小金井は卑しき人の町なりや

サツに通報

弱者いじめは

禊する泉の水の冷たさに

月を氷の

玉と見たてて

真夜中に禊の泉 見張せば

かすかに聞ゆ

せゝらぎの音

うらぶれの黄泉路の友の涙かな  
篠の上の露  
秋の墓地中

じゃま人は失せて泉は闇の中

橋げた下の

馬人の小屋

家路ゆくからすの群の後つけて  
我也行きたし

寝ぐら探して

テント屋も慣れゝば楽し 野良暮し

餓鬼とボリ公の

いじめなければ

狸穴はしぎれて秋の落葉かな

もの思う人は

ヨガを忘れて

枯れすゝき 茂れる春の多摩川は

ヨガ身につかず

風の寒きに

路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

野川辺の乗馬クラブに黒き群

相愛の仲

馬とからすは

赤提灯 ついふらゝ のなじみ顔

住居のことば

ひたに隠して

月々泣き幾夜の宿ぞ 学園の

むかでの藪は

枇杷の樹の下

時雨降る野川大橋 寒き夜は

焼酎一こん

草枕して

馬子連れマゲドの丘でヨガ修業

野川の岸辺

葉桜の春

お情けを欲しくば頼め 救急車

お役所いばる

小金井の街

老いらくの我が青春の名残かな

野川の桜

春マゲの丘

朝やけのもや立ち昇る野川べり

歩めば露に

どっぷりとぬれ

つる草の伸びて年経る九太ん棒

これこそ匠

ナチュラルの技

新くべて暖取る冬の二枚橋

黒布掛けの

橋げたの下

時雨降る野川の岸辺 荒野原

芝の抜け殻

道場の跡

からす鳴く学園跡の不気味かな

何処の山ぞ

死者の腑分けは



## 自由の國

現在世界に自由の國があるか  
俺はわがままい、なんなかの  
形で束縛されてるような  
社会人 そんな社会より、ホーム  
レスになって、生きようと考えた  
山谷寄生場、俺も50才すぎ  
た、仕事もなし、またできない  
体力もなくなって、どうしようかな

今日、あい日でもみんぱくが火を  
いろを見て感動しました。純くて  
一緒にがんばります。

## ローラベルスのエント

Right now, the only thing  
I can think of is that my  
eyes are burning from the  
smoke. It's amazing that  
everyone comes out every Sunday  
and works so hard, that people get  
fed.

# 「手打ちうどん」の由来

「手打ちうどん道」

田に一度、「うどんを食べる田」というのを作った。

勤め先の飲食店で何へかの「うどん好きとの間で話がもりあがり、遊び心でポスター書いたら新聞にたまたま載って、うどんの会はうちとだけ名が知れ渡った。毎日、田作の手打ちうどんを披露するなどと豪語しこそ、た私の熱血「うどん道」はこの様にして生まれたのだ。」

初めの「手打ち」は、本屋で立ち読みした作り方を忠実に実行。なかなかの出来ばえ。「一晩寝がせる間にひいてよくふると良い」とんな助言を受けてのべた自信満々で、やせた身二回目の出来はしていいものだ。たゞ、候や水加減、ナリなど、出来が全くちがつてゐる。再び別のへからうの助言をうけ、身三回目へ。すると「こんなやり方だめだよ」と別のへから助言が。面白いのは、助言をくれる人たちの作り方が、これぞにバラバラなこと。粉のこね方、のぼし方、切り方、ゆで方……色々なやり方があり、どれも正解で、私はその中から「自分流」の方法を見つければ良いのだ、と試行錯誤を重ねてゐる。

おかげで、これがわかると熱血料理まんがじゃなかつと、ぶつぶつとつも究極の……いや、どこあんまりあじける程度のうどんを田苗して田に一度、熟くなごむ。ぬごむ。

トヨ橋 美香



# あかい花

はり師いが丸

落葉に覆われた背の高い木々の根元から空を見上げていくと、緑の向こうにはセントチャーリーハイヤットのレンガ色の壁と東京都庁が覗く。

「まあ、食えや」という言葉はやさしさに満ちている。肩を落としている人にも、肩をいからせている人にも、軽く肩を叩くようにかけることができる、最もシンプルであったたかい言葉。

そのセリフをこの場所でもらったことがある人は少なくないはずだ。割箸を添えた飯を手元まで運んでくれた誰かから。こっそりガムや缶コーヒーを掌に忍ばせてくれる人もいる。パンの耳を揚げて砂糖をまぶしたやつ。ここで食べたそれはかつて祖母や母親が作ってくれたものよりうまかった。

新宿中央公園の一角で毎週行われる炊き出しの光景が、一般的に見て、異様なものなのか、それとも既に現代社会のよくある風景と言えるのか、今の私には判断がつかない。けれども、労いなしには過ごせない地道な作業が何年にも渡って続けられるのは、理由があってのことだ。

炊き出しで配られるビラを続けて読んでいると伝わってくるものがある。それが、そこに集まる人たちの声を代弁していると言えるのかどうかは知らない。けれども、一枚一枚のビラの底辺には、共通して流れているものを見つけることができる。それに名前をつけようとすると、「生きぬく力」という言葉が口をつく。路上に読み捨てられ、ビル風に舞い散ることもある安い紙のビラは、ダンボールの家の壁にお札の如く貼り付けされることもある。ひとりひとりに眠っている、冷たく冷え切った身体の奥底の魂に小さな灯をともすこともある。

逝ってしまった人への想いを向ける場所が欲しいと、彼岸の頃に書いたことがあるが、そんな場所があるとすれば、結局ここかもしれないと思う。忌まわしい記憶がよぎることもある。決して美しい場所ではないというのに。何かの信仰を持ち合っていたのなら、他にも術や場所はあったかもしれないが、それを求めることもない。

七月の生命を脅かすような暑さも和らぎ、色濃い夏の透度が増してくると盂蘭盆だ。

逝った人々はやさしく、残された者は勝手だ。うっかりすると、何をさらけ出しても赦してくれると思い込む。故人に伝えあぐねた想いを吐露するならまだしも、咽喉のすぐ下に、故人のあざかり知らないことまで抱えてのこのこやってくるのだから、性質が悪い。

逝った人たちを送り終えると、残暑を見舞う。夏の最後の日はいつだろう。猛々しかった夏を秋が消し去ってくれる日も、きっとくるだろう。

# 薔のゆの恋人

すてきだ、とってもすてきだ  
そういう人を考えるとどうして春egin  
したばかりか、わがままになって  
見せへたくなる、でも自然の  
ほうか〜いのなうう、運命にまかせ  
た

## 恋人

なぜこんなに樂い、夢のやうでは  
毎日、失恋したゞ、どうなるのだう  
ハヤ考えたくな  
13才の恋人、誰にもおしゃれたくない、

24.2.6 PM 2.30

### 編集後記

残暑お見舞い申し上げます。発行の頃には皆様、夏の終わりをかみしめ、秋の風を待つばかりの日々でしょか？それにしても今年の夏は暑いっ。

先日15万本のひまわりというのを見にかけたら、ひまわりさん皆おじぎをしてお出迎え。ひまわり迷路をくねくねとひまわりさんの顔を覗き込みつつ汗をかいてきました。この暑さもひまわり効果でなぜか元気。花の形が笑顔に似ているような気がします。暑い夏を後にして、秋もがんばっていきまっしょい！ではまた！（お）

### 露宿ベン俱楽部短信

残暑お見舞い申し上げます。記録的な酷暑が続いた夏でしたか、皆さんお変わりないでしょうか？

長篇連載から短編まで、露宿の紙面は自由ですので、気候が落ち着き始めるこれからの季節、是非皆様の力作をお待ちしております。

次号33号は11月1日発行予定です。原稿締めきりは10月3日必着にてお願いします！

# Rojuku

定期購読大募集

購読費・スポンサー費

送り先

郵便振替口座

00160-6-190947

「ろじゅく編集室」

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくりました。一冊でも多く雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したい思いと、利益が出れば炊き出しのお米代にしたい、理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

# 「ろじゅく」

## 【露宿定期購読の御案内】

毎号確実に読者のお手元に届けるため  
に当方では定期購読を承っております。

定期購読 8回分 5000円（郵送費込み）

定期購読 4回分 2500円（郵送費込み）

一回ごとの購入でも大歓迎。

一冊は送料込みで660円となります。

## 申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろ  
じゅく編集室）に定期購読もしくは継  
続購読とお書きになり、住所、氏名を  
明記の上送金して下さい（発行ごとに  
郵送します）。尚、郵便振替の他、切手  
での受け付けもしております。FAX、  
メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

2冊以上は送料無料、5冊2000円、  
10冊3500円、50冊15000円（いずれも  
送料込み）となります。

路上文芸総合雑誌「露宿（ROJUKU）」第32号 2004年9月1日発行（隔月刊）

主宰・笠井和明 編集／発行・ろじゅく編集室 〒160-0023 東京都新宿区西新宿4-32-4-603  
TEL/FAX 03-3373-9878/090-3818-3450（笠井）

Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp URL・<http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/>

郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」

販売協力・新宿連絡会、露宿ペン倶楽部 印刷・株式会社ラジオグラフィー

定価500円